
超常現象請負会社

蜃気楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超常現象請負会社

【Nコード】

N7276D

【作者名】

蜃気楼

【あらすじ】

「なんなんだよこれは!？」退屈な毎日を送っていた柳龍平やなぎりゅうへいはひよんなことから分けのわからない会社にアルバイトとして働くことになった。ヘタレな主人公が織り成すドタバタ物語

FILE 1：プロローグ（前書き）

はじめまして塵気楼です。はじめての作品なので緊張しています。できれば、見てくれた方に意見などをいただいて作品に生かしていきたいと思います。ついでに好きなキャラクターも教えていただけたらうれしいです。（笑）

FILE 1: プロローグ

どこかもわからない夕焼けの映る水辺で俺はたたずんでいた。此処どこだろ？何してたんだっけ？

疑問ばかりが浮かぶ俺の思考を不意にひとつの言葉が遮った。

「やあ、いらつしやい」

（男の子？俺よりは歳下そうだな・・・小学生？）

僕が話しかける前にその男の子はしゃべり始めた。

「いきなりだけど君はただ生きるだけで満足かい？毎日同じことが書かれてゆく日記を読み君は面白いと思えるのかい？」

面白くは無さそうだが、少なくとも進んで読みたくはない。俺が質問に対する答えを考えていると、彼は続けた。

「まあ、なにせよ君はここに呼ばれたわけだし・・・君にこれをあげよう」

どこから出したのかもわからないそれを彼は俺に渡した。それは一冊の本だった。

（少し薄めの辞書？）

表紙には皮が使われているらしく独特の感触がそれをつたえていた。少し古ぼけてはいるが表紙の細工は美しく中でも裏表紙から表紙にかけてかかるベルトをとめている鍵は目を引くものがあつた。しばしば渡された本に目をうばわれていた俺に苦笑まじりの彼の声が届いた。

「気に入った？きれいな本だろ？」

話しながら彼は歩き始めた。

「君はラッキーだよ。最後の一冊なんだ」それ

（ラッキー？最後の一冊？んな事いわれても）

「何の話したよ？それにこの本、鍵がないと開かないぞ」

男の子はかまわず話し続ける。

「君はどんな物語を紡ぐのかなあ楽しみだよ」

「おい！質問に答えろよ。何の話だ、それにお前何者だよ」

楽しげに俺の前を歩いていた彼は足を止めて答えた。

「ぼく？僕はただの・・・」

ポーン！！！！ポーン！！！！

！？言いかけた彼の言葉を腹に響くような音が断ち切る

「おっと、時間だ。今日はここまでにしよう」

そう言うとは彼は僕に背を向けて歩き始めてしまった。

「お、おい！待て、まだ何も聞いてな・・・！？」

気づけばいつの間にか体が沈みだしている。まるで沼にでも沈んでいるかのように身動きを封じられてゆく

「ぐくそ！！なんだこれ・・・う・・・くっ・・・う、うああああ」

何も無くなったその空間を例の少年は笑いながら見つめていた。

FILE 2：黒×サングラス「あやしい奴？」

「ぶわあ！？はあはあはあ・・・」

今まで生きていた中でも最悪な部類に入る朝だった。

（なんだよ・・・夢かよ・・・）

頭の中で夢と現実を少しずつ整理してゆく、整理してゆくうちに彼、柳 龍平「やなぎりゅうへい」はだんだんと冷静さを取り戻していくのだった。

「うえ、汗かいた。シャワーでも浴びよ」

誰が聞いているわけでもない独り言をつぶやきながら龍平は着替えを持ちフロ場に行くために自分の部屋を出た。まだ静かな家の廊下を進んでいき音を立てないように脱衣所の扉を開けた。あまり広くも無い脱衣所の中に置いてある洗濯機の上に着替えを置き、ベタベタとする寝巻きを脱ぎ洗濯籠の中に投げ込んだ。

（さっさと浴びちまうか）

浴室の扉を開けて中に入ると目の前の見える蛇口を少しずつ回していった。最初はぬるかったシャワーもだんだんと暖くなり、やっとシャワーを浴びることのできた龍平は頭からシャワーを浴びながら考えていた。

（あの夢なんだったんだろ？変にリアルだったし、そもそも夢ってこんなにはつきり覚えてるモンなのか？）

ガチャン、キュ、キュ、キュ

「ん、まあ何だっていいか」

ガラガラガシャン・・・

その後自分の部屋に帰り制服に着替えると龍平は、パンに目玉焼きに牛乳という。まるでどこかの食堂のモーニングセットの様な朝食を寝ばけた胃に流し込み、母親に無理やり頼まれたゴミ袋を持ちウダウダと家を出るのだった。

「くそ、何で俺が・・・」

ゴミ袋を片手に持ち階段を降りながら思わず愚痴をこぼす。玄関からゴミ捨て場までそう距離があるわけではない、しかし自分の意思とは別に他人に物事を押し付けられるのはやはりいい気分ではない。団地特有の無機質な階段を降り終わり退屈な焼き増しの一日の開始を告げようとしたとき、そこにはすでに龍平の想像とは違う風景があった。目の前に黒いスーツをいかにも嫌そうに着た男が立っていたのだ。

（げ！このくそ暑い中なんつーモン着てつつたてんだよコイツ）
九月に入ったとはいえ、さすがにスーツを着るには熱い気温である。着ている本人も「なんでこんなもん着なくちゃならなんだ」と全身から訴えているようにも見えた。も

（関わるのは面倒だしさっさと行っちゃおっと）
しかめっ面のスーツ男の横を通り抜けようとした時、その男は不意に言った。

「柳龍平だな」

（はいー?!?!?!???なにに、誰?どなた?何のよう?)

返事をしていいかわからずその場に固まる龍平を尻目にスーツ男は続けた。

「悪いがついて来てもらいたい、ちょっと話があるんだ……乗ってくれる」

言いながら親指である方向を指差す、示された方向には後部座席にスモークのかかった一台の軽自動車が止まっていた。

（無理無理無理!!ナニあれ?乗ったとたんヤヴァいところ連れて行きますよオーラ満載なんですけど、つか何よりアンタだアンタ!!どこの借金取りだ!!時代錯誤もいい加減にしとけ」

「これから学校があるんでちょっと……」

相手の神経を逆なでしないように遠まわしに行けないことを伝えてみる。

「じゃあ学校に送るからその間だけでも話を聞いてもらえないかな?決して怪しい者じゃないんだ」

（OH、MY、GOD！！なにそれ、そんな展開ありえるか、表情見て察しろよ！乗りたいくないんだよ！！車に！カーに！車輪のついた鉄の箱に！！怪しくない？アンタが怪しくないなら世界の99%は怪しくない人だよ！！！！）

「しかし・・・」

予想外の返事にどう断ればよいのか浮かばない。

「まあ、乗ってくれ」

なかなか返事の無い龍平に痺れを切らしたのかスーツ男は龍平をはんなば強引に車の後部座席に放り込んだ。

「え？あ・・・ちょ、ちよつと、おわあ」

ボタンッ！！スーツ男は後部座席のドアを閉めるとそのまま運転席に座りさつさと走り出してしまった。

（乗っちゃたー（泣）何？なんなの神様、僕なんかしました？）

そんな思考をぐるぐると頭の中で繰り返す龍平を他所に車は順調に目的地に向かって走っている。

「悪いね、無理やり乗せちまって、こっちも仕事なんだよ・・・」

波月高校だよね」

スーツ男はそう言って苦笑した。

「は、はい・・・」

（高校まで知ってるよ・・・）

「時間もないし早速説明をさせてもらうよ」

（来たー！！ヤヴァい話だー（泣）つか・・・殺される？東京湾行き？・・・父上、母上先立つ不幸をお許しください）

「君をスカウトしたい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい

？」

清々しいほどの静寂の後に半分オーバーヒートした頭で聞き返した。

「君をうちの会社にスカウトしたいって言ったんだ。つまり、うちの会社で働かない？」

ただでさえオーバーヒート気味だった龍平に対してこの言葉はもはや異国の言葉に聞こえただろう。次の言葉を繰り返すのに数秒を要した。

「あ、あの意味がわからないんですけど」

「おろ？資料ミスかな？君、日本人だよな？」

何か勘違いされている。助手席に置いてある封筒をガサゴソといじるスーツ男を見て龍平は口を開く。

「日本人ですよ！そうじゃなくてなんでいきなりスカウトなのかとか、どうして俺なのかってはなしですよ」

龍平の話を聞いて安心したのかスーツ男の安心した顔がフロントミラーに写った。

「あ、なんだ。そんな話しかあせったよ、僕の日本語通じないのかと思った。」

（焦ってるのはこっちだ！）

「理由は簡単だよ、君が「理の管理者」に選ばれたから」

「こ、理？」

「そ、「理の管理者」・・・この世にある数多の現象をすべて管理するもの。他にも「真理」、「管理人」、「守護者」とも言われているよ」

（・・・・・・新手的新興宗教????）

「選ばれたって言われても、俺そんなモノにあったことないし・・・
・・・応募なんかしてないですよ」

運転席のスーツ男は少しの間の沈黙を置いた後1トーン声を落とし口を開いた

「でも夢を見ただろ、暁の空間で君は「理の管理者」に会ったはずだよ」

（夢？暁の空間？会った？・・・あ、あの夢！？）

「理解できた？」

スーツ男の声は前と同じ少し抜けたトーンに戻っていた。

「夢には心当たりがあります・・・でもだからって」

キツイイイイー、ゴンッ！！

したたかに頭をぶつけた。車が急に止まったのである。

（痛ってー（泣））

「な、何ですか？一体？」

痛さのせいで少し泣き声

「何って・・・学校・・・でしょ？」

外を見ると自分と同じ制服をきた学生達があが歩いていた。

（本当に学校に送ってくれたんだ。）

「龍平君、遅刻しちゃうよ」

半分ボーっとしながら俺は車から降りた。

「じゃあ、スカウトの件考えといてね・・・勉強がんばってね。」

ガロロロロロ・・・

「あ、あの！」

龍平の引きとめもむなしく車は走って行ってしまった。

（なんだたんだ？分かわかんないよ・・・とりあえず）

「つかれた~~~~~」

まだ一日が始まったばかりだというのに、龍平は疲れきっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7276d/>

超常現象請負会社

2010年12月14日22時01分発行